

要旨

わが国において少子高齢化という社会問題が進行することは避けられないことであり、これからさらに深刻になる。また地方における過疎化による人口減少は、地域の力を急激に弱体化させていく。その中にあり、人々は集団としての生活の価値観から遠ざかり、社会における人間関係は希薄になり、その関係性や役割について真剣に考える場を軽視するようになった。このような状態に危機感を持ち、問題視して事の解決について活動をしている人たちも多くいる。しかし、これらに取り組むことはさまざまな課題や障害が伴い、個人の力では解決できるものではない。このことを円滑に解消する活動として、現在全国的に行われている「しかけづくり」としてのアートをつかったプロジェクトに注目して、現代社会の人間関係の再創造を提案することを考えることにした。

アートは良くわからないという人たちが多くいることも事実だが、アート（芸術）には祭りや非日常的な要素がたくさんあり、多くの人を集めるイベントを行い、子どもから高齢者まで広い世代に呼びかけることも可能である。

本稿のテーマのサブタイトルとしたアートプロジェクトは現代アートの作品や空間を使って、みんなが協働して行う活動であり、多くの人たちを巻き込んだ活動をして多様な人たちとの関係作りをしていくことを目的としている。こうした活動は、芸術家たちが廃校、廃屋などで行なう展覧会や拠点となる「場」を作り、野外やまちの中で作品展示や公演を行う。また芸術祭、コミュニティの課題を解決するための社会的実験活動など、幅広い形で行なわれつつある。

これは、アートの社会化が進むということであり、一部の愛好家や美術館に収められていた作品にとどまるのではなく、閉ざされた空間を飛び出し、自然や都市空間、あるいは人々が暮らす場所で行なわれているアートプロジェクトを通して、どんどん社会に出て行っている。芸術の社会的な位置づけの変容は、人文社会科学・思想の潮流とも関係している。近代になり市民が権利を主張するようになると、芸術は一部の権力者の手を離れて、市民の中で解放される。このことから広い価値観が生まれ、広がり、いろいろな分野で研究は進化していった。この様に現在の芸術の社会化は、人々が日常生活の中での創造性や表現を見直すという行為や実践のレベル、および芸術文化の公共的な意義を定義し施策を行なうという政治的な領域まで進んでいる。

次に、日本におけるアートプロジェクトの変遷について、1950年代から1980年代を「前

史」、1990年以降に各地で起こったさまざまな試みを「アートプロジェクト」と位置づけ、美術史的文脈と社会的背景をみていった。また、地域社会からの期待として、芸術を支える文化振興にとどまらず、芸術活動を人々の生活や社会全体に関わるものと位置づけ始めるのが、2000年以降の文化政策の傾向で、「ふるさと再生」や、過疎化の振興に対する「地域活性化」が叫ばれ始めた。

アートプロジェクトを語る上で「まち」は重要なキーワードである。第3章では、地域資源の見つけ方、それを連結させていく関係作りの方法に着目して、大型観光地において市民主導を掲げている大分県別府市の「BEPPEU PROJECT」（ベッププロジェクト）を取り上げ、アートの日常化から社会関係の展開活動をみていった。ベッププロジェクトは、アートNPOとして2005年に立ち上げ、翌年法人化して主に芸術鑑賞機会の充実を図ることを目的にして活動をしている。活動の事業計画、企画作り、市民との関係作りについて組織運営についても、調査と今までの活動についての考察を行なった。

その結果、「別府でしかできないやり方を見つけていこう。地方都市で、より質を高める方法を見つけていこう」ということに気づいた人々が一つ一つ積み重ねてアートフェスティバルを開催していることがわかった。

第5章の結論では、もう一度テーマとした「アート」で社会は変えられるかを問い直し、自分の考えをまとめた。筆者が考える「アートの力」は新奇なモノではなく、本来発動すべきなのだがまだ眠っている力、隠れている力を意味し、それを再稼働させたいと願っている。このことから、アートやアーティストが市民とともに活動できる場を再認識し、拡張しようという提案である。アートは単なるツールだとは捉えたくない。

テーマにした問題はそんなに簡単に解決しないし、問題の個別性を丁寧に見ていくと、一般化はほとんどできないに等しい。

しかし、その中で格闘している住民や関係者の協働から生まれる作品やパフォーマンスは、明らかに輝きを増し、新しいアートの考え方が生まれようとしている。アートは問題解決のための使い捨ての道具として出なく、未知の世界を呼び起こす鍵として位置づける必要があると考える。